

かごしま幕末絵巻

～小松帯刀の目線でみた幕末の物語～

第3巻

薩長と大英帝国



幕末偉人列伝



幕末のビジネスマン
トーマス・グラバー

Thomas B. Glover

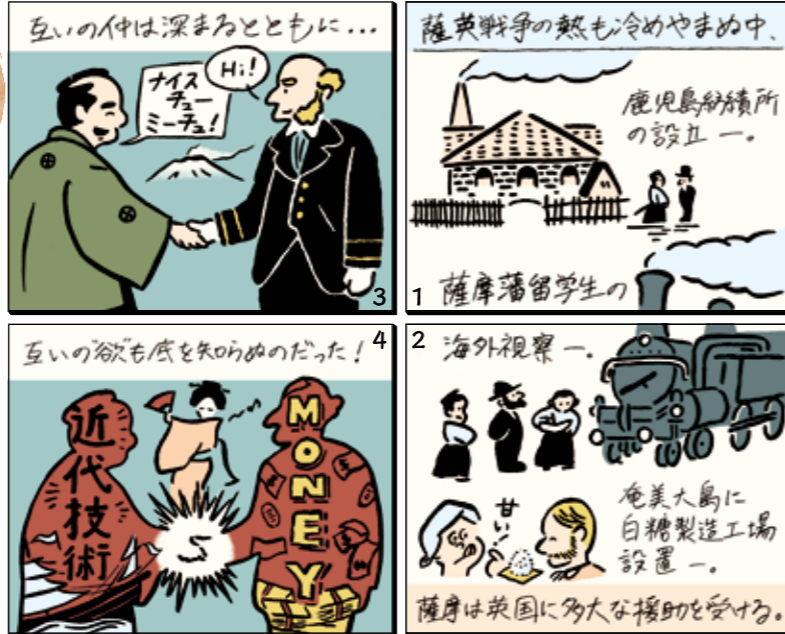
イギリス商人。長崎に拠点を構え、幕府のみならず、薩摩・長州・亀山社中などとも交易を行った。薩摩藩英国留学生の派遣にも協力。小松帯刀や五代友厚とともに築いた小菅修船所(長崎市)は、世界文化遺産となっている。

若き日のトーマス・グラバー：長崎大学附属図書館所蔵

薩英戦争後、協力関係を築いた薩摩藩と英国の思惑は……？

IJIN MANGA

～薩摩と英国、それぞれの思惑～



物語の舞台裏



奄美蘭館山

～奄美市～

慶応元年(1865)以降、薩摩藩はイギリス人技師の協力を得て奄美の4ヶ所に白糖工場を建設。奄美市の工場の背後の山は、西洋人が住まう山ということで「蘭館山」と呼ばれるようになった。

〈交通アクセス〉

鹿児島空港から飛行機で50分
鹿児島港からフェリーで11時間

〈問い合わせ先〉

奄美市役所 TEL0997-52-1111

奄美蘭館山：大島支庁

次巻「薩長同盟への道筋」の巻

薩摩藩、英国と協力！ 西洋の技術を取り入れる

薩英戦争からわずか二年後、薩摩藩は英国留学生を派遣。英国との関わりの中で、長州藩との関係にも変化が表れます。薩摩の名家老、小松帯刀の目線で振り返る幕末の物語。

〈慶応元年〉英国にて

亀山社中の設立を助け、龍馬さんたちとともに交易をはじめた薩摩藩。慶応元年(一八六五)三月、羽島(いちき串木野市)から使節・留学生合わせて十九人が英国へと渡りました。この薩摩藩英国留学生の派遣は、薩英戦争後、長崎に潜伏していた五代才助と大和の国(奈良県)出身の石河確太郎がまとめた上申書によって実現したものでした。

留学生からの情報によると、我が藩の留学生が到着した時にはすでに五人の長州藩士が英国に留学していて、ロンドン大学のウィリアムソン教授のもとに、一時期身を寄せながら勉学に励んでいたようです。その後留学した薩摩の留学生たちもウィリアムソン教授にお世話になり、長州藩士たちとの交流が深ま

ります。彼らは、ともにロンドンの郊外まで足を伸ばし製鉄工場を見学したり、農業機械の操作を体験したりしていました。ある時、藩からの資金が途絶えた長州留学生のために薩摩の留学生たちがカンパをしたこともあり、薩摩藩に親しみをもって接するようになったとのことです。日本の中では仲の悪い両藩が、遠く離れた英国では、考えられないほど良い関係を築いていたようです。

〈慶応元年〉長崎にて

薩摩藩英国留学生の実現には、船の用立てはもちろんのこと、英国人のグラバーの支援が鍵だったといわれますが、留学生派遣以外でも、グラバーは非常に薩摩によくしてくれました。

例えば、奄美の地に白砂糖製造工場の計画や長崎の洋式船の修理工場の建設などがそうです。修理工場は、協議が上手く進めば三年もあれば完成すると思います。

軍艦や武器を購入する代わりに、長州藩は兵糧米が不足していた薩摩藩に米を提供するという経済面での連携を提案し、これを両藩が受け入れることになりました。

ところで、日本との貿易の発展を望む英国は、薩摩藩だけでなく、長州藩にも接触を始めます。英国公使のパークスは、下関で桂小五郎さん、井上聞多(馨)さん、伊藤俊輔(博文)さんと会見しますが、ここで長州藩から武器や軍艦購入について相談を受けます。

その後、伊藤さんから長州藩は、グラバーからケーブル銃やミニエー銃といった近代銃を大量に買付けることに成功します。

しかし、実際には長州藩の武器購入については、幕府の厳しい監視が続いていて、表だって取引をすることはできませんでした。

長崎にいた私は、これを薩摩藩の船で三田尻へ運ばせました。彼らもさぞかし喜んでいて、英国が、このようなこともあって、英国が、我が藩と長州を少しづつ結びつけてくれているような気がします。

そこで、龍馬さんが薩摩藩名義で

【次巻につづく】